

【題目】 破壊的カルト脱会後の支援のあり方についての一考察

指導教官 山口 健二
発表者 福島 広太郎

題目設定の理由

本論文では、破壊的カルトを、非倫理的なマインド・コントロールを用いて信者の人格を破壊し、信者と信者の家族との関係を破壊し、さらに社会を破壊する団体とした。

破壊的カルトの問題では、信者が組織を脱会すればそれで終わりということではなく、信者が脱会後にどのように歩むかが重要である。脱会後の信者が抱える問題から、脱会者に対してどのような支援を行なうことが出来るかを考察するため、本論文の題目を設定した。

破壊的カルトには、組織の様子や、入信から脱会まで、さらには脱会後のことなど組織によって教義の違いはあっても多くの点で共通している部分がある。本論文では、今現在ある宗教団体の中で、どの団体が破壊的カルトであるかということ挙げようとするのが目的ではなく、破壊的カルトに見られる共通点を理解し、脱会者にどのように支援できるかを考察することを目的とした。

論文構成

はじめに	第4節 脱会後の回復過程
第1章 破壊的カルトとマインド・コントロール	第3章 リハビリテーション施設の紹介、HPの役割
第1節 破壊的カルト	第1節 ウェルスプリング
第2節 マインド・コントロール	第2節 いのちの家
第2章 脱会の種類と脱会後の諸問題	第3節 HPの役割
第1節 脱会の種類	第4章 脱会者に対する支援
第2節 脱会後の諸問題	終わりに
第3節 脱会者が失うもの	

論文内容

第1章では、破壊的カルトがどのような組織であるかを理解するため、破壊的カルトの特徴と破壊的カルトが用いているマインド・コントロールについて述べた。ある組織を破壊的カルトと呼ぶ根拠は信条や教義ではなく、組織が用いる非倫理的な方法や組織の活動の違法性である。

破壊的カルトは、信者を組織に依存させ、恐れと罪責感によって信者を支配する。そのための手段としてマインド・コントロールを用いている。ハッサン(1993)によるとマインド・コントロールは、情報コントロール、行動コントロール、思想コントロール、感情コントロールの四つの構成要素から成り立っている。

第2章では、脱会者の支援の必要性を理解するため、脱会者が抱える問題について述べた。脱会の種類としては、自発的な脱会、組織を追い出されることによる脱会、家族・友人などの外からの介入による脱会があり、それらは脱会後の歩みに関係している。

信者が脱会後に抱える主な問題として、恐れや罪責感、特殊用語、決断力の低下の問題が挙げられる。例えば、組織を離れると自分や家族に不幸な事が起こるといような恐れが脱会後も残っていることがある。また、組織に対する批判や疑問、自分で決断して行動することは高慢又は罪とみなされていたため、信者は自分で考えることがなかった。そのため、脱会後は今までと反対に多くのことを自分で考えて決めなければならないことに困惑する。

また、信者は脱会後に多くのものを失っている。それらは人間関係、時間、仕事、財産、住居、信念、価値観などである。破壊的カルトに長くいた人ほど、脱会後は生活のほとんどを立て直さなければならない。組織の中での人間関係ばかりだった信者は、脱会後は新たな人間関係を築いていかなければならない。何年もの時間の空白や財産の喪失が、脱会後の生活を困難にしている。そして、信念や価値観を失ったことで、脱会者は物事の判断に戸惑う。信者は脱会後にこれらの問題と一つ一つ向き合っていかなければならない。

第3章では、脱会者のためのリハビリテーション施設として、アメリカの施設「ウェルスプリング」と日本の施設「いのちの家」を紹介した。「いのちの家」は昨年11月に私も利用させて頂いた施設であり、所長や入居者の方々の話しを伺う機会を持つことができた。また、3節では破壊的カルトに関するHPの役割について述べた。

リハビリテーション施設は、脱会者が今までの環境を離れ、大自然の中でリラックスし、適切なカウンセリングを受けることによって自分を見つめなおす機会を得ることを目的としている。

「ウェルスプリング」では主に、心理カウンセリングと破壊的カルトや宗教的な問題についての学びから成り立っている。その他にも、レクリエーションや買い物など、以前の破壊的カルトでの生活と対照的な普通の生活スタイルを提供している。

「いのちの家」は長野県にある日本初の滞在型リハビリテーション施設であり、アメリカの「ウェルスプリング」をモデルにしてつくられた。「いのちの家」には破壊的カルト脱会者だけでなく、家庭内暴力や鬱などに悩む人も多く利用している。滞在費は1泊3食付で1日あたり2,500円となっている。また、滞在期間は数日間から数ヶ月間で、1日平均3名強になるという。

破壊的カルトに関するHPは、主に脱会者や聖職者、学者が運営している。主に破壊的カルトに関する情報、破壊的カルトでの体験や脱会者へのアドバイス、支援者の紹介などを載せている。また、HPの多くは信者も元信者も書き込みをすることができる掲示板を設けている。

第4章では、第1章から第3章までを踏まえて脱会後の支援について考察した。

破壊的カルトの中では、信者は自分で考えて行動することができず、組織の教えを疑うことなく受け入れ、行動してきた。そのため、脱会後は自分で物事を判断して行動していけるよう手助けする必要がある。支援者は、あくまで脱会者の自立支援であることを認識しておく必要がある。

多く脱会者がHPを立ち上げ、情報を提供したり自らの体験を載せたりしているように、脱会後のリハビリにとって、自分の体験を整理することが有益である。そして、恐れの問題や脱会後の生活に対する希望を持つ助けとして、脱会者の集まりの必要性を述べた。また、リハビリテーション施設のスタッフや賛助会員の多くが脱会者であることから、脱会後に新たな自分の役割を見出すことも、他の人のためだけでなく、脱会者自身のリハビリになると考えた。

脱会者の必要は様々であり、生理的な必要もあれば、精神的なゆとりや居場所の必要もある。脱会後、すぐに社会に戻る必要がある人や今までの環境から離れてゆっくりと考える時間を必要とする人もいる。よって、支援においては、脱会者の事情や必要に応じて、滞在型のリハビリテーション施設や通いによるカウンセリング等を選んでもらうことがよいと考えた。

最後に、HPでは情報の提供の役割が大きく、掲示板によって、脱会者がどのような体験をし、また支援を求めているかを知ることができる。脱会者は全国に存在するが、経済的、地理的な事情などから支援を受けることが出来ない人もいる。そういう人たちのためにもHPを通して情報提供や脱会者の必要に応えることができる支援者を求めることが有効であると考えた。

今後の課題

本論文では、脱会者の支援のあり方について考察した。しかし、脱会者の中でも破壊的カルトの中で生まれ育った人たちへの支援については扱うことが出来なかった。破壊的カルトの中で生まれ育った人たちが運営しているHPや知人を通して、彼らの体験や抱えている問題を一部ではあるが知ることができた。そして、彼らが社会的な援助を必要としていることも知ることができた。よって、今後の課題として、破壊的カルトで生まれ育った人たちへの支援のあり方について考えたい。

主要参考文献

- ・浅見定雄『特定非営利活動法人小諸いずみ会 設立趣旨書』
- ・川崎経子・大久保進・パスカルズビ・小海基.2001『ウェルスプリング・リトリート&リソース・センター報告書』
- ・スティーブンハッサン著.1993『マインド・コントロールの恐怖』浅見定雄訳 恒友出版
- ・西田公昭.1995『マインド・コントロールとは何か』紀伊国屋書店